

(3) トマトの青枯病及びかいよう病

トマトの青枯病及びかいよう病はともに細菌による病害で、高温と湿潤条件を好むため令和4年は7月が高温となったこと、8月が多雨となったことから各地で散発した。両病原細菌とも発生ほ場の土壌中で残存し、トマトが定植されると再び発病することから対策が必要である。

青枯病については、深耕還元消毒と抵抗性台木の組み合わせにより防除が可能である。また、青枯病を発症した株の根圏では青枯病菌が大量に増殖し、周囲に広がるため発症株はすみやかに抜き取ることが重要である。施設栽培では施設内が高温となりすぎないように管理し、周囲から雨水の流入を防ぐため明渠を設置する。

かいよう病は青枯病ほど急激に病勢が進展しないため、発生に気がつかないまま芽かき作業などで周囲に広がる場合が多い。青枯病は葉が緑色のまま萎れるが、かいよう病の場合は葉に灰白色にふが入ったようなすすけた汚い枯れ方になるので見分けることは可能であるが、症状だけでは区別が難しい場合もある。その場合には選択培地を用いた診断が必要である。発生株はすみやかに抜き取ることが望ましいが、現在、電熱やアルコールで刃が殺菌できる鋏が市販されており、発生状況によっては導入を検討する。太陽熱消毒や土壌燻蒸剤による土壌消毒の効果があるが、困難な場合は抵抗性台木を利用する。また、かいよう病菌は種子伝染もするので、健全な種子を用いることも重要である。

抵抗性台木を使用する際には、深植え等で穂木が地面と接触すると効果がなくなるのでかならず穂木部分は接地しないよう移植する。



写真 青枯病による枯死株(中央農試 小松 原図)



写真 かいよう病の症状(中央農試 小松 原図)